

六堰頭首工

～400年に及ぶ荒川の恵み～

独立した六つの堰を統合し、水をめぐる争いを解消しました。



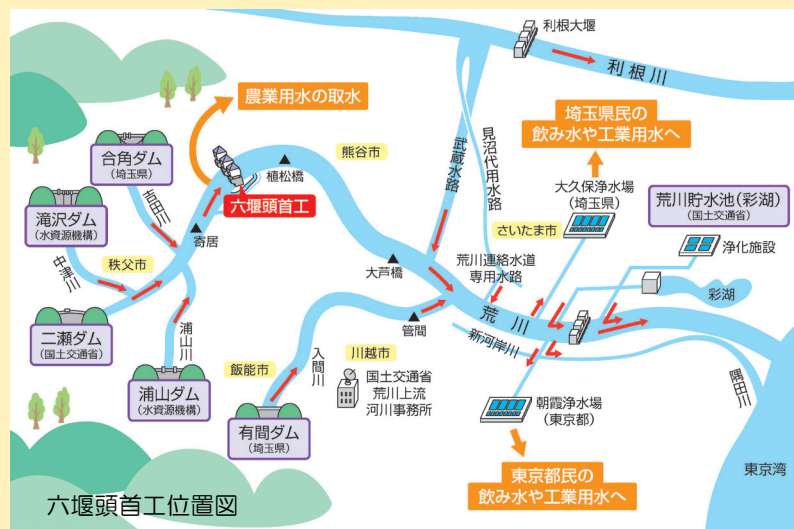
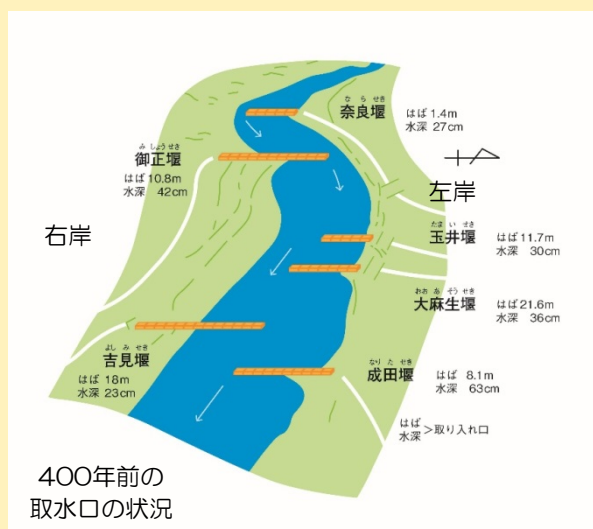
平成15年3月に完成した新六堰頭首工

六堰頭首工の名称の由来～大里用水400年の歴史～

埼玉県北部に位置する深谷市の南端を流れる荒川に「六堰頭首工」があります。六堰頭首工は荒川から水を取り入れ「大里用水」と呼ばれる水路網を経て熊谷市を中心に深谷市、行田市、鴻巣市のおよそ3,820haの水田に農業用水を供給しています。

大里用水の歴史は古く、豊臣秀吉から関東に国替えを命じられた徳川家康が江戸周辺の穀倉開発によって1602（慶長7）年に現在の熊谷市と旧川本町（現深谷市）の境界付近で荒川を堰き止め、米を作るのに必要な農業用水を取るために「奈良堰」を作ったのが始まりと言われています。

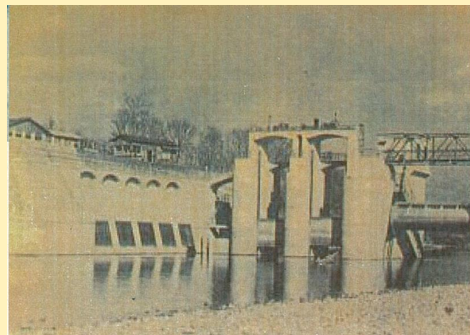
その後、十数年で約5kmの間に「奈良堰」から荒川の左岸下流に向かって「玉井堰」「大麻生堰」「成田堰」右岸に「御正堰」「吉見堰」（万吉堰とも呼ばれています）の六つの堰が作られました。この六つの用水の総称を「大里用水」と言い、六堰頭首工の名称の由来もこれら六つの堰からきています。



▶ 苦難苦闘の歴史～六堰頭首工の完成～

荒川は、日照りが続き、雨が降らないと極端に水が少なくなります。上流にある堰で水を取ってしまうと下流の堰では水が取れなくなってしまうため、六つの堰の農民達の間では、田植えのための水争いが絶えませんでした。また、逆に大雨が降ると、荒川に流れ込む水が増え洪水となり、その度に堰が流されて作り直さなければなりませんでした。

そのため六つの堰の農民達は、問題を解消させるため、大正末期に「大里用水路関係六箇水利組合連合」を結成しました。1926（大正15）年6月に既存の六つの堰を統合する改良事業の施行を県に申請し、1929（昭和4）年度から「県営用排水路幹線改良事業大里地区」として県が施行し、初代の六堰頭首工が作られました。その結果、水をめぐる争いを解決することができたのです。



昭和14年に完成した初代の六堰頭首工
※頭首工とは、河川に流れる水を農業用水として用水路に引き込むために設ける堰や取り入れ口をまとめたものを言います

▶ 生まれ変わった六堰頭首工～平成の大改修～

1939（昭和14）年から供給し続けてきた六堰頭首工は、近年では老朽化が進み、働きがおとろえていたため、1998（平成10）年度より改築に着手しました。この間、1999（平成11）年8月には大雨の影響で荒川の水量が急激に増え、六堰頭首工の固定堰の一部が壊れ、流されてしまいました。いろいろな苦難を乗り越え、新しい六堰頭首工は5年間をかけ、ついに完成しました。また、六堰頭首工の整備と合わせ、流水改善水路と緩勾配魚道の新設工事（荒川中流流水総合改善事業）も同時に施工されました。

流水改善水路は、渇水の際に六堰頭首工から下流の荒川大橋付近で発生する瀬切れ（流水が途切れて河床が露出してしまう現象）を解消するために必要な流量や上流ダム群から放流された水道用水等を六堰頭首工の下流へ流下させる水路として整備されました。



壊れてしまった六堰頭首工

コラム 水をめぐる争い

江戸時代のはじめごろ、荒川から大里地区の灌漑用水を取り入れるため、6カ所の用水路が造られました。これらの用水路は、それぞれ独立した取水堰を持ち、用水路の維持・管理は個々の用水組合が行っていました。しかし、たび重なる洪水や日照りによる水不足のため、水をめぐる争いが長年絶えませんでした。そのたびに農民同士で川をはさんで石を投げあったといわれています。



アクセス

六堰頭首工

交通：秩父鉄道「永田駅」下車、徒歩約10分

住所：深谷市永田（旧大里郡花園町）

